

第2節 (教材4-2) 「よかったね 美穂ちゃん」

—《ドキュメンタリー 結婚》から

うれしかった招待状—『ドキュメンタリー 結婚』その後—

季節が春から初夏に移ろうとしているある日、一通の四角い封筒が届きました。うれしい予感に胸を躍らせて封を切ると、やはり美穂さんからの結婚式の招待状でした。

同和教育ビデオ『ドキュメンタリー 結婚』の中で、長いこと迷い考えた末に、「黙っていたら何も始まらないから」と勇気を持って語ってくれた美穂さん。自分の出身を打ち明けよう、でも、でも……と悩むうちに消えてしまった淡い恋。心の痛みを静かに、けれど確かな口調で語る美穂さんの姿は、多くの人々の心を打ちました。

根強く残る結婚差別の壁。その高く厚い壁の前で年ごろの青年たちの心がどんなに傷つき、痛んでいることか。しかし、美穂さんは言いました。「こんど出合った人には、最初にきっぱりと打ち明けるつもり」と。そのハードルを見事に越えたのです。

『ドキュメンタリー 結婚』は中野市の小林健・美子さん夫妻の結婚までの闘いと、子どもたちに託す思いを描いた作品です。二人の結婚は、美子さんの両親と親戚の猛反対で親子の縁を切った挙式でした。二人は結婚する時に約束したことがあります。それは生まれてくる子は差別に負けない強い子に育てようということでした。そして最初に生まれた子が美穂さんでした。ドキュメンタリーは主演者が実名で登場します。この作品の重さはここにあります。差別と正面から向き合い、闘ってきた夫妻だからこそ実現できたことでした。しかし、それにはどれほどの勇気が必要だったことでしょう。「取材に応じている両親の姿を見ていて、私も話す気持ちになった」とインタビューに応じてくれた美穂さん。しかし美穂さんは当時24歳。これから人生の大切な節目を迎える年ごろです。ビデオの影響がどのようなものか、図り知れぬものがありました。美穂さんのその後がずっと気にかかり、片時も心を離れませんでした。そこに届いたうれしい結婚式の招待状でした。

彼とはどのような話し合いがあったのだろう、差別に負けない子にと願って育てた両親の思いは……。詳しい経緯を聞きたいと思いました。そしてそれを記録にとどめたいと思いました。厚かましくも結婚式の前夜におじゃまして、お話を聞くことができました。

初めての出会いは一昨年クリスマス会で、翌年の秋に再会したこと。結婚を前提として交際する前に、出身を打ち明ける決心をしたこと。でも言おうと決めてから1カ月かかったこと。思いきって打ち明けて、返事を待つわずか数秒の時間の長かったこと。彼は美穂さんの思いをしっかり受け止めてくれました。「そんなこと関係ないよ」と言われなかった事で、この人となら共に歩いていけると美穂さんは思ったそうです。結婚すれば「関係ない」ではすまされない重い現実。職場で同和教育を受けてきたという彼の両親も、部落問題をよく理解して結婚に賛成してくれたそうです。「二人が部落問題をわだかまりなく語り合えることが大事。結婚はゴールではなく、スタートなんだよ」—美穂さんに送った両親の言葉でした。翌日、みずみずしい青葉の中でウエディングドレスの花嫁は美しく輝いていました。

[信越放送ディレクター 野沢喜代—1999/7/28同和教育長野]

これから社会に巣立っていく若者たちにとって、恋愛や結婚は切実なテーマです。今までの同和教育の積み重ねの上に立って、このテーマについて話し合ひましょう。

学習のねらい

同和教育ビデオ「ドキュメンタリー 結婚」の視聴を手がかりに、教材（４－２）の読み合わせなどを通して、結婚について考え合う。

準備

同和教育ビデオ「ドキュメンタリー 結婚」の視聴と教材（４－２）

展開例

- 1 同和教育ビデオ「ドキュメンタリー 結婚」の視聴と教材（４－２）にて学習。
- 2 学級や学年集会などで、「結婚と自分」というテーマで話し合う。構成劇などで発表することも考えられる。
- 3 憲法の第14条・24条 民法第731条・第737条と関連づけて学習する。

同和教育ビデオ 「ドキュメンタリー 結婚」の視聴にあたっての留意点

- 1 結婚差別を乗り越え、部落差別をなくすために闘っている生き方に学ぶ。
- 2 「今度また生まれ変わって結婚する時もここに嫁ぐ」というビデオの中の母親の発言の持っている意味と被差別部落についての認識を考えさせるようにする。
- 3 祖父母、父母、美穂さん夫妻3代の「部落差別と結婚」について、特に、戦後の同和教育の歩みと重ね合わせて話し合わせる。（『同和教育を進めるために』の12～19ページ〈第2章 戦後における同和教育の変遷と課題〉を参照のこと。）

◇問い合わせ先等

- ・ 同和教育ビデオ 「ドキュメンタリー 結婚」及びそのシナリオについての問い合わせは、長野県同和教育推進協議会まで。

◇参考文献・資料

- ① 同和教育啓発ビデオ 「ドキュメンタリー 結婚」及びそのシナリオ（1998年製作）
- ② 「ルポ 現代の被差別部落」 若宮啓文 著 朝日文庫（1988年刊行）
- ③ 「なかまとともに」（前出）中の「二つの結婚」

【資料】

-----日本国憲法第14条、24条 民法第731条、第737条-----

第14条 すべての国民は、法の下に平等であつて、人種、信条、性別、社会的身分、門地により、政治的、経済的又は社会的関係において、差別されない。

第24条 [家族生活における個人の尊重と両性の平等]

- ① 婚姻は、両性の合意のみに基づいて成立し、夫婦が同等の権利を有することを基として相互の協力により、維持されなければならない。

第731条 [婚姻適齢]

男は、満18歳に、女は、16歳にならなければ、婚姻をすることができない。

第737条 [未成年者の婚姻]

- ① 未成年者が婚姻をするには、父母の同意を得なければならない。
- ② 父母の一方が同意しないときは、他の一方の同意だけで足りる。父母の一方が知れないとき、死亡したとき、又はその意思を表示することができないときも、同様である。

【よかったね美穂ちゃん】(教材4-2)

美穂ちゃん。ウエディングドレスのあなたは輝いていたね。あんなにうれしい結婚式に招かれたのは私も初めてでした。

思えば26年も前のこと。長野支局の記者だった私は部落差別のルポを連載してご両親の結婚式に臨みました。晴れの式場を包んでいたのは半分の悲しさ。新婦の両親、兄弟が姿を見せなかったからです。被差別部落の新郎との結婚に猛反対したのは新婦の父親、つまりあなたのおじいさん。一年にわたる二人の説得もむなしく、ついにこの日を迎えたのです。

あなたのお母さんは悩み抜きました。親兄弟との絶縁が辛いだけでなく、生まれてくる子供が厳しい差別を受けないか、それが一番の不安だったのです。でも、彼女は強かった。「子供は差別を受けるに違いない。肝心なのは、それを跳ね返せる強い子供に自分たちの手で育てることだ」と、腹を決めたのだから。もちろん誠実なお父さんを愛し信じればこそでした。

話を聞かせてくれた後で「やっぱりちょっと」と、記事になるのを断ってきたお父さんたち。私は思い余って式場をのぞきに行き、合間に説得したのです。これだけの猛反対にあえば、あきらめるか駆け落ち、あるいは自殺といった悲劇も多かっただけに、この話だけはぜひ記録にとどめたい——。二人はとうとう承知してくれました。

そんな夫婦が美穂ちゃんを頭に三児をもうけたと知ったのは、私が長野支局を離れて十年以上たってから。六年生のあなたは「差別をなくす市民集会」の壇上で作文を読み上げ、「おじいさんに会いたい。差別のない明るい社会にしてほしい」と訴えたのでしたね。

久々にご両親に再会してそれを知り、二重に驚きました。変わらぬおじいさん。会えぬまま他界したおばあさん。葬儀にも入れてもらえなかったお父さん。そうした現実にはショックだったけれど、一方でお母さんの誓い通り、美穂ちゃんたちが見事に強く育っていたからです。

共働きしながら差別と戦う運動に熱を入れ、明るくたくましく生きる姿を子供たちに焼き付けてきたお母さん。「妻にネジ巻かれて……」と笑うお父さんは、むしろ目標をもった生活の幸せを語ったものです。

そしてまた十数年。立派な社会人になったあなたでも、やはり恋愛は試練だったよね。自分のことを打ち明けようか、でも怖いな、と人知れず悩むうち消えてしまった恋もあったとか。そんな美穂ちゃんを両親がどれだけ心配したことでしょう。

でも今度は勝負だったんだ。求婚されて思いきって打ち明けたら、しっかり受け止めてくれた彼。職場で同和問題の研修を受けてきたというご両親も「部落差別の時代ではない」と賛成してくれたんだったね。こうして今度こそ満点の結婚式。「娘は逃げなかった」「私たちの運動は無意味じゃなかった」と、お父さんは涙していました。

長い歳月をはさんで二つの結婚を体験した私も、記者みょうりに尽きる感動を覚えていました。あなたがた一家のような生きざまこそ、心を揺する真の解放運動ではないか。いま、つくづくそう感じています。

美穂ちゃん。いまだにおじいさんに会えないのは寂しいでしょうが、おじいさんも本当は可哀想な人だよね。偏見で意固地になって、娘の幸せも孫の幸せも見届けられないなんて。

さて、「願いをかなえたお前はまだまだ幸運な例だよ。そして試練はこれから。結婚はゴールじゃない、スタートなんだ」とは、花嫁に贈った両親の言葉だそうですね。あなたもたくましい子供を育てなければ。

どうぞお元気で。くれぐれも彼によろしくお伝えください。

[若宮啓文99/7/16朝日新聞 コラムより転載]

同和教育ビデオ【ドキュメンタリー結婚】のストーリー

長野県中野市一野菜畑や果樹園の広がる農村地帯に、小林健（つよし）さんと美子（よしこ）さん夫妻は住んでいます。二人は25年前に結婚し、今日までともに歩んできました。出会いから結婚までには、五年の歳月が必要でした。それは部落差別の厚い壁とのたたかひだったのです。

現在、健さんは長野市に本社のある鉄道会社に勤めています。美子さんは、中野市内の老人保健施設で管理栄養士として働いています。

美子さんが健さんと出会ったのは、21歳の時でした。二人は結婚を考えるようになりましたが、健さんはどうしても自分の出身のことを話すことが出来ませんでした。

出会いから三年目の夏。健さんは出身を告げないまま、結婚の申し込みをしました。屈託なく承諾した美子さんでしたが、後日、健さんの口から直接出身のことを聞いた時は一瞬、顔がこわばったといいます。

美子さんには二つの不安がありました。生まれてくる子の将来と、予想される家族の反対……美子さんはまず、健さんを父親に紹介し、健さんの口から、出身のことも話してもらいました。

しかし、予想どおりの猛烈な反対でした。美子さんは学習会に参加して部落問題を学び、同じ課題をかかえる青年たちが、二人を支え励ましました。

二人は美子さんの親戚を回り、理解を求めました。自分の気持ちを分かってもらうために、健さんが書き綴った文章は、時に便せん20枚を超えることもありました。

二年近く真剣に部落問題を学んだ美子さんは、不安を乗り越える自信ができました。そして、変わらぬ結婚への決意を両親に伝えるために、二人で美子さんの家へ行きました。まず、美子さんが一人で話しに行き、健さんは近くのお宮で待っていました。「その一時

間というものは、ものすごく長かったですね。でも、精一杯話し合ってきた、やることはやったという気持ちでした」と健さんは語ります。美子さんは「どうしても親は説得できなかった。縁を切るから、その覚悟だったら行けと言われました。その足で婚姻届けを出しに行きました」と語ります。

結婚した翌年、最初の女の子が生まれ、三年たって二番目の女の子が、さらに三年後、今度は男の子が誕生しました。子どもたちは健やかに育ち、楽しくにぎやかな子育てでした。三人の子は小学校に入ると同時に、解放子ども会に通い、部落問題は常に生活の中で語られていました。

二人の結婚する時の約束。それは「差別に負けない強い子に育てる」です。そんな両親の思いをくむかのように成長した美穂さん。しかし、美子さんには最近の娘の様子が気がかりです。

美子さんは「娘たちの世代は学校で同和教育が行われているから、もっと開放的で自由に話せる年なんだろうけど、それが私が考えている以上に深刻なんですよ。親の私にも話さなくなったんですね。だから、ああこれは根が深いな。葛藤しているんだなって思いますね」と語ります。

その美穂さんが、カメラの前で話すことを決意してくれました。撮影も今日で終わりという日のことです。

美穂さんは24歳になります。母、美子さんが結婚問題で悩みぬいていた、その年齢になりました。「撮影に応じている両親の姿を見て心が決まった」と、静かに語りました。

「インタビューに答えているいろいろお話し出来たらいいなという気持ちと、でもこれを見て正しく受け取らない人がいると思うと、不安が大きくて……。でも、黙っていては何も変わらないと思いました」

その美穂さんにも、被差別部落出身ということに対するわだかまりがあります。「一年ちょっとつき合った人ですが、優しくていい人だったけど、つき合っていく中で、自分のことを分かってもらいたっていう気持ちがあるんですね。そこが私にとっては一番のハードルだったけれども、やはりお話しすることが出来なかった……。話そう、打ち明けよう……。でも、打ち明けたらたぶん離れていっちゃうんじゃないか。言おう、言おう……。でも、でも…その繰り返し」

美子さんの生家とは、25年たった今も断絶したままです。父親の激しい反対の前に、娘の結婚を祝うことも出来ずに世を去った母親の心情を思う時、美子さんは深い悲しみに襲われます。「父には内緒で喪服だとか、きちっと揃えてあって、最後のあいさつの日だったか、私に持たせてよこしたんですね。私は改めて、これが母親なんだなあって思っ。こんなにつらい思いをさせた、部落差別っていうものが許せなかった」

美穂さんは、そのまだ見ぬおじいさんに対し、話を聞くとすごく優しい人だったって…。会えるものなら会いたくなって思います。

[ドキュメンタリー結婚のビデオの紹介パンフより転載]